

当代文学備忘録① 馮驥才

釜屋 修

1987年7月の例会案内に「第五号では FengJicai の特集を考えています」と書いた。私の名の案内ではあるが独断ではなかったと思う。それがいざ原稿を依頼する段階になると、みんなどこかへ行ってしまった。研究会で馮驥才をとりあげたのは、29回から31回まで計3回、1987年7月から12月までであった。作品は「阿!」「船歌」「感謝生活」「愛之上」「三寸金蓮」「神鞭」「走進暴風雨」「一百個人的十人」「雕花烟斗」「高女人和矮丈夫」の10篇、ただし「一百個人」はその中の三篇のみであった。馮驥才論とはとてもいかないので、この限られた作品の中で、論ずるしかない。正直なところ、深く心に残る作品はない。

馮驥才の（もう一度断っておくが限られた作品読みの中であるが）全体としての印象は、器用、多才、多作の、通俗大衆作家といったところである。文革中の知識人の、不遇や抑圧された生活という深刻なテーマをとりあげ、やや軽いタッチながら（いや、むしろこの軽さが馮驥才の本質的なものというべきか）なかなかの筆力で描き、ご丁寧にも、前書きを添えて、「これらの、社会進歩を阻害し、生活を毒する現象が、いまだ深刻に認識され、教訓をくみ取って徹底的に取り除き、断ち切られていない限りは、再生の条件が存在しているのである。となれば、この小説と同一性質の作品は、無用ではありえないし、また、避けることができないのである」と（これが馮驥才の通俗性を隠す俗流哲学ヴェールなのだ）しながら、結局は洗面器の底に張り付いていた手紙というトリッキーな構成でしか、前書きの重さを受けとめられないところが、馮驥才の大衆作家的資質の典型的な表れである。この馮驥才システムは、「三寸金蓮」では、結末の纏足派vs天足派の対決というクライマックスで、親娘の邂逅というメロドラマ仕立てとなって、読者に「ああ!」を強要してくるし、「神鞭」では、荒唐無稽のカンフー野郎が、時代の流れに沿って、北伐軍の二挺拳銃の使い手に変身する。カンフーと歴史の安直な結合は、馮驥才の筆が冴えれば冴えただけ、ペテン性を増し、中国の読者を騙し、中国古典文化に無条件の崇拜を寄せる人のいい日本人読者は、馮驥才の清末風俗への考証のおもしろさにも引きず

られて、「ああ！」とひれ伏すかも知れない。

一方、「愛の上」「感謝生活」「船歌」「走進暴風雨」は、馮驥才システムが顕在しない作品であるが、人物形象が鮮明ではなく（あるいはアッケラカンと善悪二型に類型化され）、テーマもありきたりである。なるほど、お得意のスポーツの実況描写（「愛」）、小説のプロット展開には関係のない労働者群像の賑やかなしゃべりのシーンなど（「走進」）、この作家の非凡な描写力がうかがわせる。しかし、それらはすべて、全体としての馮驥才への評価を覆してはくれない。

「雕花烟斗」は、パイプの模様彫りや菊づくりといった馮驥才好みの職人芸を背景に、名も無き庶民の誠実で、人間らしい生き方を謳歌しようとして、「金蓮」や「神鞭」の、“怪世奇談”シリーズのジレットアンティズムに遥かに及ばず、テーマも平凡きわまりないみごとな駄作である。

知識人を描くことに、作家としての一つの使命観をもつ馮驥才が、力まずユーモラスに、しかもしつとりと描ききったインテリ夫婦と都市団地族の物語り「蚤の夫婦」（「高女人和矮丈夫」）は、数少ない佳作である。158cmのズングリムックリの化学工場総工程師の夫は月給180元、175cmのノッポの妻は、貧しい郵便配達夫の娘で今は化学検査員で月給60元、団結大樓住民の好奇の目は、このつりあいのとれない夫婦（肉の缶詰と空の酒ビンと噂される）の結合について、さまざまな憶測を撒き散らす。やれ性的欠陥がある、貧乏娘が男の金めあてに結婚した云々。文革ではスパイの疑いすらかけられた。しかし、二人の間にこどもが生まれ、チビ亭主がこどもを抱いたノッポの妻の後ろから傘をさしかけて団地の中を行く姿は、滑稽でも、読者に生活感を伝えてくれる。文革の嵐が過ぎ、住居は狭いところに変更させられたが、二年ぶりに夫も釈放された。また二人の睦まじい、しかしユーモラスな姿が見られたが、まもなく妻は脳血栓で倒れ、逝ってしまった。再婚のすすめを断ったチビの亭主は、こどもと二人の生活を始めた。雨の日、かつて妻に傘をさしかけた時と同じスタイルで出かける彼を見て、人々は「あの傘の下にはなんだか大きな空間があって、広々していて、この世のいかなるものも、そこを埋めることはできないかのように感じた」。自分ではどうすることもできない身体的欠陥を嘲弄することへの無神経さについては、いわずもがなである。

馮驥才の今後を考えていく上で、前述した通俗的大衆作家、サービス上手の風俗作家という以上の存在に成長しうるかどうかを考えていく上で、「一百個人的十年」は、一つの材料を提供してくれる。ほんとうに百人の十年を描くの

か、張辛欣の後塵を拝さないための工夫はどうするのか、など今後をみなければならぬ。「我到底有没有罪？」は、文革で痛めつけられた親娘三人が一家心中をはかり、結果的には女医である娘が父親を殺すことになって文革に対する「抗拒運動殺人罪」に問われ、無期懲役の判決を受ける。79年、「殺人にはあたらず、集団自殺である」として逆転無罪判決をうけた女性の、それでもなお尊属殺人の罪の意識から脱却できないでいる痛ましい告白である。「復讐主義者」は、毛語録を写しまちがえ反革命現行犯にされた男性の、自分を“整”しておいてのうのうと今も泳いでいる人間に復讐を誓い、彼らが法の網に引っ掛かってくる日のために法律の勉強に精出す姿を描いている。この二篇の四、五倍のスペースを使って書かれたのが、「一個老紅衛兵的告白」である。一家の不幸を救ってくれた党が、反右派闘争では自分のやさしい国語教師を右派にデッチあげていく恐ろしい顔を見せた、この矛盾した経験の中で動揺しつつも、なお党への信頼を捨てず、大学進学をやめたとびこんだ農村で徹底した党幹部の腐敗ぶりを見た男が、やがて政策に便乗して大学に入る。反動学生から紅衛兵へと転身しつつ、運動の中でまた失望を味わい、四人組打倒後ようやく自分が歴史の大きなベテンの中に置かれていたことを知り、中学教師、修辭学者として再生を計る。今は中年のこの男性の話は、多くの紅衛兵たちの回顧談と共通していながら、なおかつ迫力がある。客観的には大きな過ちを犯したが、その瞬間のおれたちの誠や純粹さは解ってほしいという告白は、まだ十分に答えの出ていない問題の一つである。文革の齎した世界的犯罪性と、こうした個人レベルの心情との間の調和は可能なのか、私にもふんぎりがつかない。馮驥才の見解はないが、前書きでは、例によって哲学風の言辭で、20世紀の悲劇にファシズムと文革をあげるが、それはそれでいいのである。

今はこの作家の早過ぎる老成や風俗作家への定着を危惧しておくこととする。
(1988.6.)

【短言】 1 シカゴ大学極東図書館より資料請求があり、会報を送付。また、駒沢大学図書館には、関西の大学より問い合わせがあった。

2 7月11日夜、釜屋は来日中の作家尤鳳偉氏（作家協会山東分会副主席）と会い、約2時間半懇談した。1943年生まれ、素朴な中に熱い闘志を秘めた人と拝見。作品集に《月亮知道我的心》(1980)、《愛情從這里開始》(1983)など。
